



心の歌を奏でて

—神の涙— ①

芳田尚哉

ぽつぽつと雨の音が聞こえる。

雨が降ってるのか……。

うっ、とぼんやりとした頭を押さえる。少し痛い。

体にもあまり力が入らない。

怠さを感じながら、ゆっくり体を起こそうとして、自分が横になっているんだと気付いた。

「よっと」

起きようとするが、力が入らないのと、なにかが体の周りがあるので、上手く起き上がれない。

どうなってるんだ？

もぞもぞと動くと、体の周りがあったものが、ゆっくりと、少しずつだけど、破れていく。

なにがあるんだろう？

どうやら、そんなに硬いものじゃないらしく、簡単に破れていく。

内側から叩くようにすれば、案外楽なものだった。

ぼすぼすと叩いていると、外が見えた。

白い天井が見えた。

「よっと」

上半身が出るくらいには破れたので、体を起こす。

「うわっと」

起きあがった瞬間、巨大な黒いものが見えたので、心臓が口から出るかと思った。

危ない危ない。

こんな所で心停止なんて、シャレにもならない。

まだ少し重い頭のまま、その黒いものの正体がなにかを確かめる。

「……………蜘蛛(アラネーオ)か」

そこにいたのは、間違いなく蜘蛛(アラネーオ)だった。

見慣れているとか関係なしに、起きていきなり見れば驚くよな。

でも、よかった……。

蜘蛛(アラネーオ)がいる事で、不思議と安心感があつた。

なんだか、不思議な夢を見ていた気がするから余計だろう。

「よいしょっと」

俺を包んでいるなにかから抜け出す。

そうして、ようやくその正体を確認する余裕ができた。

「これって……」

俺を包んでいたものは、蜘蛛(アラネーオ)の糸で作り上げたもののようにだった。どうやら、俺は蜘蛛(アラネーオ)が自らの糸で作った繭の中にいたらしい。

「俺はいったい……」

なにをしていたんだっけ。

記憶が曖昧だ。

不思議な世界にいた気がするけど、あれは夢だったのか。

これが現実なんだろうか。

夢と現実の区別なんて、なかなかできるものじゃない。なんの確信もないんだから。

現実だと思っても、実は夢だったなんて事があるかもしれない。

逆もあるかもしれない。

なにせ、確かめる事ができないんだから。

夢の中でだって痛みがあるだろうし、死ぬかもしれない。結局、なにが現実かなんてわかるわけない。

もっとも、夢だったらしいものも、ぼんやりとしてきて、はっきりと思い出せない。

なんだか、不思議な世界だった気がする。

その記憶が薄まっていくという事は、ここが現実なのかもしれない。とにかく、今の俺にとっては、ここが現実の世界なんだ。

体を動かしてみると、節々が痛い。これはきっと、体を動かしてなかったからだろうな。

どれだけこうしてたんだろう？

「って、キヨカは……」

不意に思い出した。っていうか、忘れててすまん。

周囲を見ると………すぐにわかった。

近くに、大きな繭がある。おそらくこれだろう。

「なあ蜘蛛(アラネーオ)。これって、キヨカだよな」

「資格者(ティトーロン)に相違ない、

「そっか……。無事なんだよな」

「休養中、

「それならいいや」

ホッと胸を撫で下ろす。

「それとなんだけど、俺ってどのくらいこの中にいたんだ？」

時間の感覚がない。

……って、蜘蛛(アラネーオ)も時間を把握してるのか？　そういう概念ってあるんだろうか。

「不明なり 我 時間の概念なし、

「そっか……」

やっぱ、そうだったか。

ここにいたら、夜かどうかもわからないよな。そもそも、ずっと雨だからそういう感覚がないんだよな。

どうしたものか。

もっとも、それがそれほど重要かと問われたら……重要だろ。どのくらいかで、気分的に違う

。

そりゃ、どうしようもないってのはあるけど、あまり経っていると、ある意味じゃ浦島状態だぞ

。

時計があったらな……。

少しずつ体を動かして、固まっているのを解していく。

「外はやっぱ雨だよな」

ひとりごちて、外の様子を確認する。

「だよな……」

外は相変わらずの豪雨だ。どれくらい経ってるのかわからないけど、それでもずっと降り続けている。

それにしても……。

どこかに流れているのか、水位は上がっていない。ある一定のところまで止まっている。一〇センチか二〇センチといったところか。それ以上にはならないようだ。

どこまで見ても、同じような光景だけど、どこかに終わりがあるようだ。

そこまでどのくらい掛かるかわからないから、気安く行ってみるわけにはいかないよな。

俺だって本調子じゃないし。キヨカだって無理はできないだろうし。

だからって、ずっとここにいるわけにもいかないんだよな……。

さっさと快復して、蟲(ベステート)を封印しないと。

蜘蛛(アラネーオ)にあまり負担はかけられないから、俺が頑張らないといけないし。

このまま、快復を待たずに修行するか、それとも快復を待つか……。

気持ち的には前者なんだよな。だけど、それで上手くいかないのは、経験済みだ。

焦ってもいい結果はでない。

「なあ、もうちょっと繭の中で休ませてもらえないか」

「承諾、

「サンキュ」

甘えかもしれないが、ゆっくり休ませてもらおう。

もぞもぞと体を動かす。繭の中って、妙に落ち着くんだよね……。このちょうどいい狭さがい
いん
だろうね。

私って、そんな性分なんだよ。どうせ、旅館とか広いお部屋だと落ち着かないんだよ。
やっぱり、この狭さはいい。

「ん〜っ」

繭の中でできるだけ体を伸ばす。

よく寝た……。

今日で三日かな……。

えっと……この世界に来て、その日に倒れちゃったんだよね。

次の日、その次の日も眠ってて……。そして今。この世界の四日目。

少し頭がぼんやりして、体が痛いけど、だいぶよくなった。

万全じゃないけど、調子はいい感じ。

でも……。

「おなか空いたな……」

眠っていただけだけど、四日ほど飲まず食わずなんだよね……。脱水症状で死んじゃってるよ
、きっと。

でも、私は生きている。トールちゃんも生きてるよね。

まあ、水分はアーちゃんが繭で不純物を取り除いて、少しずつくれてたんだよね。私はちゃん
と気付いてるよ。

「アーちゃん、ありがとね」

ゝ……………ゝ

聞こえてるはずだけど、アーちゃんは答えない。

シャイなのかな……って、そういうんじゃないよね、きっと。

「よしよよしよ」

繭を開けて、顔を外に出す。

「う〜ん」

やっぱり、外の空気って気持ちいい。もっとも、ここもアーちゃんの繭の中なんだよね。

「おはよう」

時間としてはおかしいんだけど、やっぱり起きた時はこれだよね。

ゝ先刻 譜遊の四護 起床せり、

「えっ？ ホント？ 元気そうだった？」

ゝしばし 再度 休養、

「そっか……。でも、ちゃんと目を覚ましたんだね」

よかったよ。ちゃんと薬が効いたんだね。

「はう……」

思い出すと、顔が赤くなっちゃうよ。

トールちゃんは、気付いてないだろうし、言うつもりもないけどね。

まさか、口移しで飲まされたなんて思ってないだろうし。

……って、顔が熱いよ。真っ赤になってそう。

恥ずかしい恥ずかしい。

でも、トールちゃんもまだ本調子じゃないんだね。

そりゃそうか。

この状況じゃ、完全に……は難しいよね。

やっぱり、しっかり食べないとだよ。食事もしないで、病気がよくなるなんてないよね。

だからって、食べ物はなにもないんだけど。

それでも、なんとかここまでよくなったんだよね。人間ってすごいね。

トールちゃんがまだ休んでるなら、私もそうしようかな。

だって、ずっと動いてると、ますますお腹が空いちゃうもんね。

これ以上、無駄なカロリーは消費しないように……って、もしかしてこれって絶食ダイエットになってる？ そのつもりがなくても、これで痩せたりするのかな。

ふにふにと胸を触る。

……うん、小さくなってないよね。よかった。元々そんなにないんだけど。これ以上小さくは、乙女として危機だ。

お腹もふにふにしてみる。

「はう～」

あんまりスリムになってない。これは、げっそりしてるって感じだよ。痩せてるというよりも、痩せこけているだよ。

健康的じゃないのはよくない。

でも、ちょっとくらいは痩せたかな。

今の状態で食べても、少しくらい痩せてるはず。これで、ちゃんと食べてれば……でも、リバウンドしちゃうそう。

そこそこをキープするのって、すごく難しいよね。これって、人生の課題だよ。

そういえば、雑誌なんかだと、男の人ってちょっとぽっちゃりがいい、なんて書いてたりするけど、あれって本当なのかな？ ぽっちゃりって……いやいや、ないでしょ。それはない。

やっぱり、モデルさんみたいにスリムな人がいいんだよ。だって、テレビに出てる美人のタレントさんとか、女優さんって、みんなスリムじゃん。ぽっちゃりなんていないよ。

そりゃ、お笑いとかバラエティ系で、太めの人はいるけどさ……。その人たちがモテるかっていうと、どうなんだろうね。

芸能ニュースで、恋人発覚で話題になるのは、やっぱりスリムな女優さんだよ。

だから、私はぽっちゃり好き説は信じない。やっぱり、痩せてる方がいいに決まってる。

よし、これをきっかけに、この状態を健康的にキープしてみよう。難しいけど、なんとかやっ

てみよう。頑張ろう。

とにかく、今はゆっくり休もう。

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

再び目を覚ました。

さすがに、もうこの状況に驚かない。

繭をゆっくりと破って、起き上がる。目の前にいきなり蜘蛛(アラネーオ)の姿があっても驚かない。

「おはよう」

ゝ……………ゝ

蜘蛛(アラネーオ)からの挨拶はないが、それは別に構わない。

「あっ、トールちゃん」

どうやらキヨカも起きたらしい。

「おう、おはよう」

「おはようだよ」

「元気になったみたいだな」

蜘蛛(アラネーオ)の話によれば、キヨカは薬を飲んでなかったみたいだけど、どうやら元気になったみたいでよかった。

「うん、もう大丈夫だよ」

「なんか、薬を飲ませてくれたみたいで……ありがとな」

「あっ、うん……」

あれ？ なんだか妙なりアクションだな。

「キヨカ、顔が赤いけど、どうかしたのか？」

「ううん、なんでもないよ。大丈夫」

ぶんぶんと全力で首を振る。そんなに否定する事なのか？ まあ、いいけど。

「とにかく、キヨカのお蔭で快復したよ」

「うん、よかったよ。これで、蟲(ベステート)と闘えるね」

「そうだな」

この前は、完全に体力が尽きて負けてしまった。

じゃあ今は大丈夫なのか……正直難しいだろうな。体力は戻っていたとしても、病み上がりだ。どこまで動けるんだろうな。

かといって、調子を戻すために修行なんてしている余裕はない。

「やってやるさ」

とにかくやるしかないよな。

「でも、ここじゃ私のフルートが使えないんだよね」

「そういや、雨だもんな」

湿気が多いと、フルートはダメになってしまう。この豪雨の中、使えるわけがない。

「大丈夫だって。この前は、なんとかキヨカのフルートがなくても使えたんだぜ」

「えっ、そうなんだ」

キヨカは手を合わせて喜んでくれる。

「まあ、心の中でキヨカの音を思い出しながらだけだな」

本当に一人の力じゃない。キヨカの支えがあってこそなんだけどな。

……って、なんで俺はそんな事まで言ったんだろう。言ってしまってから後悔。照れるじゃんか。

「そっか、そっか……。うんうん、さっすがキヨカちゃん。やっぱりトルちゃんには私が必要だね」

キヨカは、えっへんと胸を張る。

まあ、これに関しては、それくらいの価値はあるよな。

「蜘蛛(アラネーオ)は、この雨の中はやっぱり動けないか」

`困難、

「なるほど」

やっぱそうだよな。

「やっぱり、トルちゃんが頑張らないとだね」

「そうだな。なんとかやってみるか。でも、蟲(ベステート)がどこにいるかなんだよな……。なあ、どこかわかるか？」

`探知可能 現在探索中、

「頼む」

蟲(ベステート)さえ見つければ、なんとかやってやる。

けどその前に、対策を立てないとな。

俺はあの時、手も足も出なかった。まともな攻撃すらできていない。その状態で、勝手に体力が尽きて自滅したわけだ。

動きを捉えられない相手に、なにもできずに、ただ体力だけを消耗した。それに加えて、あの豪雨がじわじわと体力を奪っていく。あれも蟲(ベステート)の攻撃ってわけだ。

あの豪雨は、なかなか防げるものじゃない。傘とか合羽でなんとかなる勢いじゃない。これに関し

ては、なんとか耐えるしかない。

だとすれば、俺が蟲(ベステート)に対抗するには、蟲(ベステート)の動きを見極めるしかない。そもそも、まだその姿を見てすらいない。

見えないほど小さいとは思えない。それは、気配や感覚でわかる。気配だけでその存在を大きく見せているわけじゃないはずだ。

「トルちゃん、どうしたの？」

「あ、ああ、今回の蟲(ベステート)はどうしたらいいかと思ってな」

「そういえば、どんな感じだったの？」

そっか、キヨカはどんな蟲(ベステート)なのか知らないんだよな。その現場まで行ってないし、その後も話をしていない。今が初めてだ。

「それがさ、俺もまだ見てないんだ」

「見てないの？ でも、蟲(ベステート)と闘って、あんな風になっちゃってたんだよね？」

「そうなんだけどな。……速すぎて、見えないんだよ。気配はわかるんだ。そこにいるのはわかってる。だけど、姿を見る事ができない」

「そんなに、すごいの……？」

「ああ」

「トールちゃんってさ、動体視力はいい方だよな？」

「そうだろうな」

じいさんの修行の成果なのか、割とその辺は鍛えられている。普段の生活に役立つものじゃないんだけど。

「そのトールちゃんが見えないっていうのは……」

「単に、俺の能力不足なんじゃないか。まあ、言い訳するとしたら、雨のせいで見えづらいつてもあるかもな」

「そっか、その雨のカーテンのせいかもしれないよね。だけど、それに加えて、蟲(ベステート)自身が速いんだよね」

「だろうな」

「でもさ、音でわからないものなの？ やっぱ、雨で消されちゃう？」

「音……？ ああ、移動する時か。確かに、下は水が溜まってるから、音がしてもいいかもしれないな」

そう言われてみればそうだな。

どんなに静かに移動しても、水の音はするはずだ。もっとも、それも雨の音でかき消されている可能性はあるけど。

「でも、音はしなかった気がする」

俺だって、耳を澄ませていた。いくら雨の音があるといっても、全く違う音があれば気付くはずだ。そのくらいを聴くくらいの自信はある。

それでも、全く聞こえなかった。

「音を立てずに移動か……。どんなだろうね」

「さあな。水の上を歩いてたりするんじゃないのか」

そう言った瞬間、キョカがバシバシと俺を叩く。

「そうだよ！ そうだよ、トールちゃん」

やけにテンションが高い。

「どうしたんだよ、急に」

いきなりのはいテンションについていけない。

「だから、トールちゃんがさっき言った事だよ」

「はあ？ 俺が言った？」

「そうだよ」

バシバシと叩くのは勘弁してくれ。

「だからなんだってんだ」

「水の上だよ」

「水の上？」

なんの事だ？ キヨカはなにを言ってるんだ？

「ちゃんと説明してくれよ」

「鈍いな……。さすがトールちゃんだ」

なんだ、この貶され方。

「うるせえ。とにかく、ちゃんと説明してくれよ」

「もう……。もうちょっと、状況を理解しようよ。そして、前後の文脈で、言いたい事を察しようよ」

「だから、説明してくれっての」

「理解できてないトールちゃんに、優しいキヨカちゃんが説明してあげましょう」

「だから、早くしろっての」

「よしよし、落ち着け落ち着け」

むっ！ すっげえムカつく。

だが、ここでなにかを言っても、余計に長くなるだけだ。ここはじっと待つとしよう。

「……あれ？ なにも言わないの？」

「……………」

反応しない。

「しょうがないな。ちゃんと説明してあげるね」

ようやくだ。

「説明もなにも、トールちゃんが言ったまんまなんだけどね」

だから、俺がなにを言ったんだ？

「水の上だよ。蟲(ベステート)は、水の上を移動してるんだよ」

「水の上を移動？ そんな事ができるのか？」

水の上に立つなんて、どう頑張っても無理だろ。忍者じゃあるまいし。

「それができるんだよ、きっと。っていうか、蟲(ベステート)相手に常識とか意味ないと思うよ」

「まあ、そうだけどな」

確かに蟲(ベステート)という存在自体が非常識なわけだし、俺たちだって世間一般からすれば非常識な存在だろう。それを踏まえると、この旅に常識を持ち込むのはよくないのかもしれない。だけど、どうしても常識というフィルターで考えてしまう。

「そもそも、水の上を移動できないなんて、その考えが問題だよ。実際に、水の上を歩く事だってできるよ」

「忍者とか？」

「……………」

そんな言葉に、キヨカは一瞬フリーズして、

「ぷっ、ぷははっ、あははっ、あはっ……」

腹を抱えて、盛大に笑いだした。

「トールちゃん、その発想はすごいよ。思い浮かばなかった。もしかしたら、トールちゃんって天才なのかも」

それは褒めてないよな。莫迦にしてるよな。完全に莫迦にしてるよな。

言葉に出して確認すると、なんだか惨めになるのでやめておく。

「すごいすごい。でも、今回の蟲(ベステート)って、忍者なのかもしれないね」

ますますムカつく。

だけど、言い返せばなんだか負けだ。このままでも、充分負けてるんだけど、なんだか言い返せない。

「トールちゃんってさ、科学とか生物って苦手？ でも、これって物理なのかな……。まあいいや」

「どれもそんなに得意ってわけじゃないな」

文系というのは言い訳なんだが、さほど得意な教科ってのはない。どれもほどほどで、強いてなかが得意かと訊かれると、言葉に詰まってしまう。

「表面張力だよ」

「ヒョウメンチョウリョク？」

しばらく考えて、なんとか理解する事ができた。

表面張力か。なるほど。確かに、それなら……。

「そうだよ。表面張力。水が押し返そうとする力。その力を上手く作用させれば、水の上にだって受けるんだよ。忍者みたいに」

「……………」

まだそれを言うのか。

だが、よく考えてみれば、水の上を移動するってのは可能なのか。完全に浮いているわけじゃないにしろ、船がそうでもんな。ホバークラフトだってあるじゃないか。

その原理なら、水の上を移動する事だって可能だ。蟲(ベステート)にモーターなんてないんだから、無音で移動する事だって可能になるはず。

「すげえな、キヨカ。よくそんなの思いついたな」

思いつけば簡単なのかもしれないけど、それでもすごいと思う。

「なに言ってるの。言ったのはトールちゃんでしょ。トールちゃんが言ったから、私はそこから

思いつけただけなんだよ」

「いやいや、それでもすごいだろ。そもそも、言った俺が思いつけてないんだから」

「それは、トールちゃんが鈍いからだよ。もうちょっと、頭の回転をよくした方がいいと思うよ」

「うっ……」

グサッと心に突き刺さる。

それを言われると、どうしようもないな。

確かに俺はそんなに知識もないし、頭の回転だってよくない。今までだって、なにかにつけてヨシマサに頼ってたからな。あまりに使えるヤツがいると、ついつい頼ってしまうんだよな。

「とにかく、これで相手の秘密がわかったね」

「まあ、そうだという確証はないけどな」

「絶対にそうだよ」

「そうだといいけど」

可能性の段階で、それだけに集中するのはよくない。

仮定はあくまでも仮定だ。いくつかの可能性から、真実を導き出さないといけない。

そのためには、あらゆる可能性を見つけ出し、それぞれに対して、ありとあらゆる手段を考える。その必要がある。

だが、今回に関しては、考察材料が皆無に等しいという事と、この仮定が真実の可能性が高い事から、これに絞って考えてもいいような気がする。

「わかった。とにかく、そうだとしよう。蟲(ベステート)は水の上を移動する。だとすれば、そんな相手に対して、どう対応すればいいのか」

「……それは、トールちゃんが考えてよ」

「おい、なんだよそれ」

丸投げかよ。まさかの展開だな。

「だって、私はヒントを示したでしょ。だったら、そこから応用して考えようよ」

「応用ったってな……」

なにをどうするんだよ。

蟲(ベステート)は水の上を移動している。

そのせいで音は聞こえない。さらに、速い。

つまり、姿を捕捉するのが困難って事だろ。

そんな相手にどうすればいいんだよ。

「トールちゃんってさ、本当に苦手なんだね」

「なにがだよ」

「だから、科学とか生物とか物理とか」

「……よくわからんが、とにかく理科系は得意じゃないな」

「理科系も、だよな」

「……………」

悔しいが言い返せない。

「しょうがない。理科ができないトールちゃんのために、キヨカちゃんが考えてあげましょう」
なんだか偉そうなのが気に障るが、この状態だと文句も言えない。ここは黙ってキヨカに頼るしかないのか。

「お願いします、キヨカ様。俺に知恵を貸してください」

「およ？ 急にしおらしくなっちゃったね。それはそれでどうかと思うよ。卑屈で低姿勢なのは、日本人の美德なのかもしれないけど、そんなんじゃ、世界を相手になんてできないよ」
.....なんか、正論ではあるな。

もともと、俺たちは本当に世界を相手にしてるわけだけど。しかも、ありとあらゆる世界だからな。地球上なんて、狭い範囲でしかない。

それすらも相手にできないのにな。

なんだか、あまりにも規模が違いすぎて、よくわからなくなってくる。

「わかったよ。俺が考える。だけど、ヒントくらいはくれてもいいんじゃないか」

「しょうがない。じゃあ、私も考えてみるから」

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

そうして、俺たちはしばしどうすればいいのかを考える事になった。

蟲(ベステート)の移動方法は推測できたものの、その姿を見てもいないので、具体的な対策はなかなか難しい。

何度も都合よく蟲(ベステート)が現れるとも限らないので、次が最後のチャンスだと思わないといけない。

そういや、旅に出る前にも言われた気がする。

蟲(ベステート)は俺たちが準備できるのを待ってくれるわけじゃない。だから、常にどんな状況でも対応できるようにしておかないといけない。

そんな事を、じいさんだったか、それとも椎崎さんだったか、どっちかに言われた気がする。まさに今がその時だよな。

俺たちは準備ができていなかった。そもそも、体調管理ができていなかった。だから、蟲(ベステート)から逃げるしかなかった。

そして今もこうして、なにをすればいいのかわからず悩んでいる。

「トールちゃんは、なにか思い浮かんだ？」

「サッパリだ」

姿もわからない相手に対して、どう戦えばいいかなんて、やっぱり思い浮かばない。もう少しなにか材料があればいいんだけど……。

「もしかして、トールちゃんって相手の形から考えてない？」

「形って……？」

「えっとね……どういう姿形をしてるのかって。それがわからないから、どうしたらいいんだろうって」

「そりゃそうだよ。それがわからないと、どうしようもないに決まってるだよ」

「ダメだ……。うん。ダメのダメダメだ」

「なにがダメだってんだよ。じゃあ、なにから考えるんだよ」

「そんなの決まってるでしょ」

すっげえ自信たっぷりに言われてもな……。それがわかってれば、少しは対策が浮かぶっての。

「形なんてどうでもいいんだよ。とにかく、わかっている事から考えないと」

「わかっている事？ それって……」

「相手の特性だよ」

「特性？」

「そうだよ。わかっているのは、蟲(ベステート)は水の上を移動するって事でしょ。だから、そこからどうすればいいのかを考えるの」

「だから、そのためにはどんな姿かって……」

「そんなの必要ないよ。とにかく、特性に対処する方法を考えるの」

なにが言いたいんだ？

キヨカが回りくどいのか、それとも俺が鈍いのか……。

とにかく、キヨカが言いたい事がサッパリわからない。

「だったら、教えてくれよ」

「もう……。本当にトールちゃんは……。少しは自分で考えないとダメだよ。そんなだから、ゆとり教育は、とか言われちゃうんだよ。自分でしっかり考える。それが必要なんだよ」

なんだか、キヨカがどこかにいそうな教育者に見えてきそうさ。

つうか、キヨカだってそのゆとり世代なんだけどな。

まあ、キヨカの場合は、じいさんがいたからな……。あのじいさんなら、ゆとりの中でも厳しさはあったろうし。

「わかったよ。とにかく考えてみる。相手の特性からだな」

わかったよ。考えてやろうじゃないか。

あそこまで言われて、黙ってるわけにはいかないだろう。ここは、いっちょ見返してやろうじゃないか。

名誉挽回。

汚名返上。

相手の特性だろ……。

蟲(ベステート)は水の上に浮いている。

浮いている相手を相手するには……。

……………。

……………。

……。

うっわあ、思い浮かばない。

浮いてる相手って、どうすりゃいいんだよ。今まで、そんなの意識した事なかったぞ。

もしかして、俺って単なる不勉強なのか？

いやいや、待て待て。普通の生活してて、こういう事はないぞ。浮いてる相手と闘うなんてない。そもそも、闘う事すらないってのに。

浮いている相手……。

浮いてるといえば、やっぱり船か。

船？

ちょっと待てよ。

船を相手に闘うなんて……。どうすりゃいいんだ？

船同士だとまだ海上戦って事でわかるんだが、こっちは普通の人だぞ。人对船って……。船相手だろ……………。想像できない。

どうすりゃ、そんなのと闘えるんだよ。

……って、実際の相手は蟲(ベステート)だけだな。

その蟲(ベステート)の姿がわからないから、大きさもわからないんだけど。

いやいや、さっきキヨカに姿形を気にするなって言われたばっかだろうが。大きさとか関係なく考えないとダメだろ。

特性だけを考える。

特性——水上を移動する。

対策——模索中。

水上を移動するものとして、俺が思い浮かぶのは船くらいだ。

船——水上を移動する乗り物。

特徴——詳細不明。

……………ダメだろ。船に乗った事はあるけど、どういう理屈で浮いてるかってのもわかってなかったくらいだぞ。

確かに言われてみれば表面張力だの、浮力だの……色々とあるのはわかるんだが、意識した事はないもんな。

つまり、今はその意識してなかった部分をどれだけ意識するかって事だよな。

だけど、普段考えもしなかったものを、どうやればいいんだよ……。

船ってどういう特徴があるんだろう？

船舶について勉強した事なんてないし、そもそも興味すらなかったもんな……。

もしかしたら、ヨシマサなら知っているのかもしれないけど、今は連絡できないもんな。

やっぱ、誰も頼れない今、俺がなんとかするしかない。

「う～ん……」

腕を組んで考える。

「そーいや、こんなに考える事ってあったっけ？ どれくらいぶりだろう？ 確か……って、そんなの今はどうでもいいんだよ。それよりも重要なのは、水の上を移動する相手をどうするかって事だろ。」

「どうしても横道にそれるんだよな……。」

「水の上だろ……。」

「水の上。水の上。水の上……。」

「だから、水の上って想像できん。」

「トールちゃん……どうかなあ？」

「キヨカがにやにやしてきやがる。くっそお。なんだか負けた気分だ。」

「なにか思いついたのか？」

「そうだねえ。どこまでできるかわからないけど、なんとなくできそうな感じがする事は思いついたよ」

「マジで？」

「うん。蟲(ベステート)をさ、船だと思って考えたらわかると思うよ」

「船って……。俺だってそう思って考えてるさ。だけど、なにも思い浮かばないんだよ」

「そっか……。そこまでは辿り着いてたんだね。だったら、わかるようなものだけだな……」

「そうなのか？」

「普通そうだよ。船と一緒に考えたら、わかるはずなんだけど……」

「すまん、もうちょっとヒントを下さい」

「あのねえ……」

「キヨカは呆れて大きなため息を吐く。」

「これ以上は、私が思いついた事そのままだよ。全部言うようなもんだよ」

「そうなのか」

「そうだよ」

「……そこまで言われると、完全に負けだよな。」

「でも、俺のプライドとか、この際どうでもいい。」

「今重要なのは、蟲(ベステート)をどうするかって事だ。その対処方法が重要なんだ。」

「それでも頼む」

「トールちゃん、少しはプライドを持った方がいいよ」

「うっ……」

「俺って、簡単にプライドを捨てすぎなのか？」

「だけど、そこに拘る必要はないはずだ。」

「もうちょっとね、男の子のプライドを大切にされた方がいいよ。それは重要だと思うな……」

「そうかもしれないけど、今はさ……」

「わかったよ。じゃあ、ヒントで～す。蟲(ベステート)の動きが速くて闘えないんだよね。だったら、動きを止める方法を考えたら、今のトールちゃんなら大丈夫だよ」

「……………」

なるほど。そうだよな。倒す事ばかり考えてた。

倒す前に、どうすればいいのかを考えないといけなかったんだ。

「そうだよな。動きを止めないといけないんだよな」

「そうだよ。じゃあ、動きを止めるにはどうしたらいいと思う？」

「動きを止める……？」

「そうだよ。水の上を移動する相手の動きを止める」

「動きを……止める」

「そのくらいでいいかな。キヨカちゃんのヒント終了」

「……………サンキュ。ちょっと考えてみる」

「よしよし、いい子だね。ちゃんと考えるんだよ」

「……………」

その言い方が微妙だったが、今はそれよりも考える事に集中したい。

「トールちゃん、集中しすぎだよ。ちょっとはツッコんで欲しいかな……」

淋しそうな顔をするが、今は構っている余裕はない。

「無反応。こんなに真剣なトールちゃん、見た事ないかも」

なんか、失礼な事を宣っているようだが、実際そうだろうな。キヨカの前で、こんなに真剣に考えるような事はなかったもんな。

っていうか、そもそもキヨカと会うのだって、あの時がすっげえ久しぶりだったんだっての。

それが今じゃ、こうして一緒に旅をしてるんだからな……。わからないもんだな。

いやいや、また考えが横道に。脱線しすぎだっての。

キヨカがくれたヒントを思い出せ。

水の上を移動するものの動きを止める。倒すんじゃなくて、動きを止めるだけだ。

船で考えてみればいいんだよな。

船の動きを止めるにはどうすればいいんだ？

まず簡単なのは、エンジンを切れればいいんだよな。

だけど、蟲(ベステート)にエンジンなんてない。そもそも、これだって、自分が乗り込んでいないとダメだ。

じゃあ、動いている船を外から止めるには……。

……………撃沈させる？

いやいや……撃沈させるのは無理だろ。それって、既に倒してるって事だろ。それができないから苦労してるんだって。

他にどうして止めたらいいんだ？

……う～ん。

船を止める。

止まれと叫んで止まってくれたり、なにか信号を送ったり……。

ダメだ……蟲(ベステート)相手にそんなの意味がない。

だったら、他になにか考えないと……。

船だろ……。船、船、船。

エンジンを切るでもなく、沈没させるでもなく……。

他に止める方法といえば……。

そうか。

転覆だ。

転覆させればいいんだ。

船は転覆したら止まる。

「トールちゃん、わかったの？ にやにやしちやって……」

にやにやしてるのか。

「ああ、わかったよ」

「ふうん、自信ありそうだね。じゃあ、なにか教えてよ」

「ズバリ、転覆だろ」

「……………」

あれ？ キヨカがぼか～んとしてる。

「どうしたんだよ。転覆させればいいだろ。そうしたら、動けなくなるだろ」

「……………そうだね。確かにそうだね」

感心してるようでもありつつ、棒読みだったりする。

「おいおい、どうしたんだよ。正解だろ」

「そうだね。三〇点ってどこじゃないかな」

「三〇点？」

「そうだよ。遠からずも近からずだね。確かに、船だったらそれでもいいかもね。むしろ、船だったらそうだよね」

「なんだよ、すっきりしないな」

「それは、トールちゃんの考えが甘いんだよ。船で考えるのはいいんだけど、船で考えすぎだ。もうちょっと、柔軟な考えを持とうよ。相手は蟲(ベステート)だよ。船と違って、きっと陸上でも動けちゃうし、なんだったらすぐに体勢を立て直すかもだよ」

「相手の特性を考えろって言ったのはキヨカだろ」

「そうだけど、もうちょっと考えないと。トールちゃんは、真っ直ぐすぎるんだよ。少しだけひねくれてもいいんじゃないかな」

「ひねくれろってか？ 真面目に考えろって言ったり、忙しいな……」

「そんなのどうでもいいんだよ」

「どうでもって……」

なんだか、だんだん毒舌になってきてないか？ っていうか、それだけ呆れられてるって事な

のか。

俺って、そんなに手間の掛かるヤツなのか。

「もうちょっと考えて下さい。っていうか、視点を変えてみたらどうかな。転覆もいいと思うよ。でも、もうちょっと考えてみよう」

くっそ……。なんだか、キヨカに試されてる気がする。どうして、キヨカにそんな事をされなきゃいけないんだよ。

だけど、キヨカは核心的なとこまでわかってるんだよな。

わかってるなら、教えてくれてもいいとか考えてしまう。そもそもが、俺が自分で考えるようになって事なんだけどな。

頼り癖はなおしておくべきだろうし。

このままだと、キヨカに頼りっぱなしだもんな。

「わかった。もうちょっと考えてみる」

「よしよし。ちゃんと考えてみてね」

なんだか屈辱的だな。キヨカにこんな風に言われるなんて……。今まであり得なかった。想像すらしなかった。

それなのに、まさかこんな事になるなんて……。

ずっと、キヨカが俺の後ろをついてきてたはずで、俺がずっと面倒を見てきたはずで……。それなのに、今は逆だ。

俺はキヨカに頼っている。キヨカの後ろをういていつている。

いつの間に逆転したんだろう。

いつからこうなった。

ぶんぶんと首を振る。

.....いやいや、今はそんな事はどうでもいい。考えるな。

そういうのは、これからなんとかしていけばいい。この旅で、少しでも成長すればいいんだ。

それにこの先、俺がキヨカを引っ張らないといけない時だってあるだろう。

.....あるかな？

あると信じよう。

だから、今は目の前の事だけに集中。

「トールちゃん。この環境も考えるといいかもだよ」

「この環境ね.....」

「それと、超特大ヒント。ヒナゲシさんと一緒に戦った時の事を思い出してみてよ」

「.....ヒナゲシさんと一緒にの.....」

ヒナゲシさんと一緒に蟲(ベステート)と戦った時か.....。

あの時は、ヒナゲシさんの炎帝と俺の風伯(ふうはく)の能力を合わせて.....。

合わせて、巨大な積乱雲を作って.....。

積乱雲？

雷？

移動する蟲(ベステート)に雷を落とせば.....。

いやいや、死ぬだろ。

俺も感電するっての。

なにせ、足下は全部水だからな。

俺の足下だけ水を無くせれば別だろうけど.....。

ん？

水を無くす？

水が無くなれば、水の上を移動する相手は動けなくなるんじゃない.....。

そうだよ。水がなければ、転覆とかしなくてもいいんだ。

そもそもの部分を無くせれば、足を止める事ができる。

なるほどな.....。

「わかったぜ」

「おっ、今度はどうだろうね.....」

ふふん、今回は自信があるぜ。.....って、今までも自信はあったんだけどな。

「じゃあ、言ってみてよ」

「言うぞ.....」

「うん。ドキドキだね」

「水を無くせばいいんだ」

ズバツと言ってやった。

「……で？」

ん？ 意外な反応。よくわかったね、とか喜びながら言うかと思ったんだけどな……。

「だから、相手が水の上を移動するなら、その水を無くしちまえばいいんだよ。そうすれば、相手は動けなくなる」

「でも、蟲(ベステート)が陸上も動けるとしたら？」

「そうかもしれないけど、水の上よりは遅くなるはずだ。少しでも遅くなれば、捉える事ができるかもしれない」

「……………」

キヨカは目を閉じて考えている。

もしかして、これも違ったのか？ これなら大丈夫かと思ったんだけどな……。

っていうか、これに正解なんてないだろ。キヨカが考えている事を当てるだけになってるし。

「トールちゃん」

キヨカがじっと俺を見る。

「な、なんだ？」

「……………」

じいっとこっちを見る。

「な、なんだよ。なにか言えって。どうせ、これも違うんだろ。わかったよ。他の事を考えるよ」

「トールちゃん」

声色が変わった。ビクンと身構える。

「お、おう」

なんだ、この緊張感は。無駄に緊張する。

あり得ない。キヨカ相手にこんな感覚、絶対にあり得ない。

「トールちゃん、えらいえらい」

……………ん？

ぽすぽすと頭を撫でられる。

「そうだよ。水が無ければ動けなくなるよね。少しでも遅くできれば、トールちゃんなら大丈夫。それでだね……どうやって水を無くすのかな？」

「それは……巻き上げちゃうつもりなんだが……」

どうして俺は恐る恐るなんだ？ 卑屈になってきてるよな。

「うん、えらいえらい」

またぽすぽすされる。

なんだか、気分的にむず痒いな。

「私もそれがいいと思うよ。トールちゃんが、風伯を自在に使えるんなら、その力で相手の周囲

の水を巻き上げちゃえばいいんだよ。だいたい位置はわかるんだから、きっと大丈夫だよ」

「お、おう……」

なんだろう……。あまりに褒められると妙な気分だ。

「じゃあ、それでいってみようか」

なんだか、今にも飛び出しそうだな。

「ちょっと待て。蟲(ベステート)がどこにいるかわからないだろ」

「そうだった。ねえ、アーちゃん、蟲(ベステート)がどこにいるかわかる？」

「察知できず、」

「そっか……。見つからないか。じゃあ、見つけたら教えてね」

「了承、」

「というわけで、準備だけしておこう」

「そうだな」

「じゃあ、早速だけど手順の確認ね」

「ああ」

「まずは蟲(ベステート)の位置を確認」

「おう」

「そしたら、蟲(ベステート)の周りの水を飛ばしちゃえ」

「おう」

……って、やけに簡単に言ってくれるが、そんな楽なものじゃないんだぞ。

だけど、それを実行しないとイケないんだよな。

頑張ろう。

「そういうわけだから、頑張ってね、トールちゃん」

にっこりキヨカスマイル。

「ったく……」

「わかったよ。やってやるさ」

こうなりゃ、やるしかない。蜘蛛(アラネーオ)が自由に動けないし。そもそも、かなり蜘蛛(アラネーオ)には助けてもらったし。

この場は、俺が頑張る場面だ。

「なんだったら、フルート吹こうか？」

「ここなら吹けるよな。」

「そうだな。お願いしようかな」

「せっかくだし、キヨカの演奏を聴いておこう。やっぱり、なんだかんだで和むし。落ち着くん
だよな……」

「どんな音楽よりも、キヨカの演奏がいい。」

「すっかり、キヨカの音に魅了されてるんだよな……」

「しょうがないなあ。じゃあ、ようやく答えに辿り着いたトールちゃんのご褒美だよ」

「どこまでも上から視線なんだが、キヨカのお蔭で突破口が見えたので、今回は素直に従ってお

こう。できれば、今後はこういう事がないようにしたいけど。

「頼むよ」

「了解だよ」

そうして、キヨカの独奏会が始まる。俺だけのための演奏だ。もっとも、蜘蛛(アラネーオ)にも聴かせているつもりだろうな。独り占めってわけにはいかないな。それは贅沢すぎるってもんだろ。

しかし、キヨカの演奏って気持ちいいんだよな。どうしてこんな落ち着くんだろう。

同じ曲でも、違う人が吹くとやっぱり違う。

そんなに音楽に詳しいわけじゃないから、違いなんて説明できないんだけど、キヨカの演奏は落ち着く。それしか説明できない。理由なんてどうでもいいんだけど。そういうものってわけだ

。

しばらく耳を傾けていると、あっという間に曲は終わっていた。

もっと聴いていたいと思うのだが、あまり無理も言えない。なにせ、俺もキヨカも病み上がりだ。

「サンキュな」

「どういたしましてだよ。トールちゃんの中の、キヨカちゃん分は満タンになったかな？」

「ああ、そうだな」

俺の中は、キヨカの音で満たされた。これで、蟲(ベステート)とも闘える。準備は整った。

「じゃあ、あとは蟲(ベステート)が現れるのを待つばかりだね」

「おう」

意気込んだはいいものの、蟲(ベステート)は俺たちの都合に合わせてくれるわけじゃない。

待てど暮らせど、蟲(ベステート)は姿を現さない。

「もういなくなっちゃったとか？」

「そんなはずはないだろ。だって、外はまだ豪雨だぞ」

ちらりと外を見るが、天候は変わっていない。相変わらずの豪雨だ。

「でも、これって蟲(ベステート)の影響じゃなくて、元々だったらさ……」

「そうかもしれないけど、だからって蟲(ベステート)がこの世界にいるって事は事実だろ」

「アーちゃん、どうかな？」

「蟲(ベステート)は存在 ただし 詳細は察知できず、

「そっか……」

「とにかく、蟲(ベステート)はこの世界にいるんだ。この広い場所が、どこまで続いているかわからないけど、結構広そうだし、離れた所にいるかもしれないだろ」

「そうだね」

言っではみたものの、俺だって不安だ。もし、もうこの世界にはいなかったら……。そんな事を考えていた。だけど、蜘蛛(アラネーオ)がこの世界にいると感じているわけだから、とにかくそれは大丈夫だ。

あとは、この世界のどこにいるかなんだが……。

あまり遠くにいと、探し出せないかもしれない。

そして、どのくらいの時間が掛かるかもわからない。

俺たちは、この世界の情報がなさすぎて、不用意に移動する事ができずにいる。願わくば、向こうからやって来て欲しい。

「どうなっちゃうかな……」

自然と不安になってしまう。

俺たちには時間がない。

この旅自体は、もうどのくらいの期間になるのかわからない。最初の頃に比べると、時間の感覚がよくわからなくなってきた。

なのでそれはいい。

問題なのは、この世界に足止めされる時間だ。

俺たちは、飲まず食わずだ。

この状態で、いつまで耐えられるかって事だ。

なんだ、この既にじり貧な籠城戦は。完全に背水の陣というか、崖っぷちというか……王手というか、チェックされてるといふか……。

とにかく、ギリギリの状態だ。

「蟲(ベステート) 発見せり、

この状態で、その言葉がどれくらい嬉しいか、きっと俺たちにしかわからない。

「トールちゃん」

「おう」

絶対に封印する。

とりあえず、動きを止めるんだ。

キヨカと考えた作品を反芻する。

「よし、行こう」

蜘蛛(アラネーオ)が作ってくれた糸のテントから出る。

「うっわあ……」

わかっていたんだが、やっぱりすごい勢いだ。とんでもない豪雨だな。

「トールちゃん、大丈夫？」

「ああ、なんとか。蜘蛛(アラネーオ)、蟲(ベステート)はどの辺だ？」

「ここより丑寅の方角なり、

「……はい？」

「トールちゃん、二時半の方角だよ」

「いや、それってすげえわかりにくい」

「二時と三時の間くらいだよ」

「……………まあ、とにかく行くか」

もうちょっと、わかりやすく教えてもらえないものだろうか。わかりにくいにも程があるだろ

。

「うん、行こう」

そう言うと、キヨカは蜘蛛(アラネーオ)を戻して、一緒についてくる。

できればキヨカには、雨に打たれないように待っててもらいたいところだが、最終的には蜘蛛(アラネーオ)が必要なので、そういうわけにはいかない。

蜘蛛(アラネーオ)は最後の仕上げまでとっておかないとな。

「すごい雨だね……。ほら、トールちゃんもどう？」

「ん？ なんだ？」

キヨカがなにかを渡してくる。

「なんだ、これ」

それは、なにやら白いものだった。

「なあ、キヨカ……」

と、キヨカを見ると、なにやら白いものを頭に被っている。それはかなり広いものらしく、肩から背中まで覆われている。なんだか、合羽というか、フードがついたポンチョみたいだ。

「トールちゃんも使ってみたら。結構いい感じだよ」

改めて渡されたものを見る。どうやらこれは、キヨカが身に着けているものと同じものらしい

。

フードになっていそうな部分を見つけて、頭に乘せてみる。

「おっ、なんだこれ」

なにかはよくわからないが、これはなかなかいいぞ。

軽いし、なんだかほんのりと温かい。なにより、雨を防げている。

こんないいものがあったのか。

「キヨカ、こんないいものがあったなら、最初から渡してくれよな」

「それは無理だよ」

「えっ？」

どういう事だ？

今はあるわけだよな。でも、さっきまではなかったって事なのか？

「だってそれ、アーちゃんが作ってくれていた、繭で作ったんだもん」

「蜘蛛(アラネーオ)が作ってくれた繭……」

そう言われて改めて見ると、確かになにかの糸を組み合わせた感じだ。

「蜘蛛(アラネーオ)の糸なのか」

「そうだよ。だから、さっきまでなかったの」

「そうか……。すごいな、これ」

「でしょ」

なんだかキヨカは自慢そうに胸を張る。

「蜘蛛(アラネーオ)、サンキュな」

キヨカの左手に向かって語りかける。

蜘蛛(アラネーオ)からの返事はないけど、とりあえず俺の気持ちを伝えたからそれでいい。

「それにしても、よくこんなのを思いついたな」

「えっへん。キヨカちゃん偉いでしょ」

「ああ、そうだな」

ここは素直に褒めておこう。

確かにキヨカはすごい。

こんな事を思いつくなんてな……。

この旅に出て、今まで知らなかったキヨカを、たくさん知った気がする。

元々、そんなに知っていたわけじゃないのかもしれないし、そもそもが小さい頃のものだったわけだったし、その頃と比べたら違って当たり前だろう。

それでも、やっぱり新鮮だ。

キヨカって、こんなに遅しく成長したんだな。

なんだか、不思議な気持ちだ。

「これで雨は大丈夫でしょ」

「そうだな。この雨を防げてるだけで充分だ。最高だよ、これ」

雨に打たれるだけで体力が奪われてたからな……。それが解消されただけで段違いだ。

これで雨を気にせず闘える。

それでも、視界は悪いままだ。音も聞き取りづらい。

集中しないとな。

ぎゅっと風伯を握りしめる。

「さあ、蟲(ベステート)を封印するぞ」

「おーっ！」

俺たちは、蜘蛛(アラネーオ)が示した方角——東北東（最初からそう言えってんだ）へ駆けていった。

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

どこまでも同じ景色だ。なので、どのくらい離れたのかわからない。雨だし、そんなに速くは移動できない。

そもそも、蟲(ベステート)がいる場所までの距離がわからない。方向しかわかってないんだよね。

そんな状態で、よく出発したもんだと思うね。まあ、それくらいしか情報なんて無理だろうな。それ以上は、望みすぎだろう。

「トールちゃん、まあだかなあ？」

「そんなの、俺が知るかよ。蜘蛛(アラネーオ)に訊いてくれ」

俺だって、あとどのくらいなのか知りたいっての。

こんな大量の荷物で、雨の中を移動だぞ。蟲(ベステート)に遭遇する頃には、疲れ果てていそうだな。それは絶対にできないから、なんとしても体力を温存しないとイケない。

それを考えるから、あまり急げないんだよね……。

ゆっくりと、ジョギング程度を意識して走る。つい気が急いでペースを上げそうになるが、なんとか我慢してゆっくりと走る。

もちろん、それはキヨカも同じだ。直接戦うわけじゃないけどな。

「トールちゃん、やっぱり荷物は私が運ぶから、先に行っててよ」

またか……。

「できるか。何回同じ事言うんだよ。俺たちは一緒にいないとダメなんだから、一緒に行くんだって」

そういう旅の前提もあるけど、この前のような状況にしたくない。

「だけど、トールちゃんまで無駄に疲れちゃうよ」

「なんとかやってやるさ」

「……………まあ、トールちゃんがそれでいいなら」

キヨカはまだなにかを言いたそうにしているが、それ以上は心にしまいこんだようだ。

悪いな。

気持ちはすっげえ嬉しいんだけどな。

だからこそ、俺は甘えたくない。

なんでもかんでもキヨカに頼りっぱなしでいたくない。

ちっぽけな意地かもしれないけど、これを失くしたら俺は全てを失うだろう。

だから、最後のプライドの欠片は大事にしたい。

全部、俺の我儘だけど。

`蟲(ベステート) 接近せり、

おっと。

いきなりだったので、思わず滑りそうになった。

「トールちゃん」

「ああ」

蟲(ベステート)が近くにいるってわけか。

この場所で、蟲(ベステート)が来るのを待つか。

「蜘蛛(アラネーオ)、蟲(ベステート)が来たら教えてくれ」

「了承 蟲(ベステート) 接近中、

ついに決戦の時ってわけか。

緊張してきた。

「頑張ってるね」

「ああ」

荷物はキヨカに預けて、風伯を抜いて構える。

さあ、かかってこい。

蟲(ベステート)が来るであろう方向を睨みつける。

「蟲(ベステート) 接近 まもなく接敵、

いよいよだ。

「トールちゃん、来るよ」

雨の音が変わったんだろう。キヨカにもわかるようだ。

「わかった」

ぎゅっと風伯を握り締める。

「来た」

「……………」

緊張が高まる。

じっと目を凝らす。

「あれか」

ようやく俺にもわかった。

豪雨の中、確かにその姿があった。

「なるほど……」

俺はこいつに振り回されてたのか。

細長い脚に、細い体。重さはあまりないんだろうな。そのお蔭で水の上に浮いていられるってわけだ。

器用に水の上を移動していやがる。体も細いので、雨の影響もあまりないし、音の変化も小さい。

こいつはなかなか厄介かも。

だけど、水さえなければなんとかできそうかも。

「トールちゃん」

「ああ」

蟲(ベステート)は、こちらに向かってくる。

俺は、その周囲に向けて、風伯の力を放つ。

「……………すごい」

キヨカは初めて見るんだよな。

どうよ。一人でここまでできるようになったんだぜ。

……自慢するような事でもないんだけどな。

「よし、いっけえ！」

蟲(ベステート)は俺と風伯が発生させた風の中に閉じこめられる。

姿が見えてればこのくらいはできるさ。

風を起こして、水と一緒に巻き上げる。

風で周囲を囲い、蟲(ベステート)を閉じこめる。そして、中の水を一気に巻き上げていく。

「すごいすごい」

巻き上げられた水は、その周囲に降ってくるわけだが、元々豪雨なので、もうどうでもいいと思える。

「よし、このまま……」

と、勝利を確信した時、ドサリという鈍い音がした。

「な、なんだ？」

風と雨による水煙で、視界が悪いのでなにが起きたのかわからない。

「トールちゃん、さっきのってなに？」

「……………」

俺だってわからない。

なんだろう……と、少し近付いてみる。そんなに変わらないかもしれないが、もしかしたらわかるかもしれない。

そう思って、音がした方へ歩いていく。もちろん、風伯の力は維持したままだ。これがまた難しいんだが。

そろりそろりと近付く。

ちなみに、怖いからってわけじゃなくて、風伯の力を維持するのが難しいからゆっくりなだけだぞ……と、誰かに言い訳をしておく。

ゆっくりと近付いていくと、なにか大きな影のようなものが見えてきた。

この辺は、どこまでも平らな大地が続いていたはずだ。見える限り、山はおろか大きな岩さえもなかった。

だけど、今目の前には、確かになにか大きなものがある。

なんだろう……。

そう思って、さらに近付こうとした時、

「後退せよ、

突然、頭の中に声が。

蜘蛛(アラネーオ)か。

コウタイ……って、

考える暇はなかった。

「うわっ！」

反射的に後ろに飛ぶ。

目の前をなにかが横切った。

「うわっ、な、なんだ？」

そのままバランスを崩してしまい、水の上に尻餅をついてしまう。

「トールちゃん」

キヨカが走ってくるのがわかる。

「来るな」

パシャッと水の音。どうやら、止まったようだな。

「キヨカはここにいてくれ。……蜘蛛(アラネーオ)、これはいったいなんだ？」

「蟲(ベステート)なり、」

「……………マジかよ」

端的でわかりやすい。

まさか、この目の前にある大きな影が……。

つまり、さっき目の前を横切ったのって……。

「間一髪ってどこか」

少しでも反応が遅れていたなら、もしくは蜘蛛(アラネーオ)の声がなければ、俺は蟲(ベステート)の攻撃をまともに受けていたかもしれないってわけか。

「蜘蛛(アラネーオ)、本当に助かったぜ。……だけど、蟲(ベステート)は風伯の風の中にいたはずじゃ……」

俺は確実に蜘蛛(アラネーオ)を閉じこめた。あの風の壁を破るなんて、できるとは思えない。そんな事をされれば風が乱れるので、さすがにわかるはずだ。

だけど、蟲(ベステート)はこうして目の前にいる。風伯の力を逃れている。

「どうなってんだ？」

風伯の力を止める。本当にここにはいないのか？

ゆっくりと風が止んでいく。

……………いない。

風の壁の中には、なにもいなかった。

じゃあ、本当に……。

どういう事かわからないけど、蟲(ベステート)はあの中から脱出したらしい。

「トールちゃん、作戦変更！ とにかく、蟲(ベステート)だけを風で閉じこめて！」

キヨカの声で、現状に戻る事ができた。

どうやって脱出したのか、それは後で考えよう。

今は、目の前の事だ。

蟲(ベステート)が逃げないように、蟲(ベステート)だけを風で囲む。

……って、どうやって蟲(ベステート)が脱出したのかわからないと、また脱出されるんじゃないのか？

とにかく、逃がさないように、今度は巻き上げるんじゃなく、風で覆うだけにする。

「トールちゃん、わかってるじゃん」

「……………ん？」

なんだか嬉しそうだが……俺がなにをわかってるっていうんだ？

「キヨカ、なにがだ？」

「……………もしかして、わかってないの？」

キヨカは、口をあんぐりと開けている。

おいおい、なんだよそのリアクション。

「トールちゃんって、やっぱり莫迦だ。でも、本能でわかってるんだね」

「だからなにがだよ」

相変わらず、なんだかイラッとくるんだよな。

「もう……莫迦だよな、ホントに。さっきみたいに風で巻き上げたら、また蟲(ベステート)が風と一緒に飛び出るから、今度はそうやって囲ってるんじゃないの？」

「……………なるほど」

そうか。どうやって壁を突き破ったのかと思ってたけど、そうじゃなかったんだ。

蟲(ベステート)を外に出したのは俺だったんだ。

水と一緒に、蟲(ベステート)も飛ばされて外に出た。あの鈍い音は、蟲(ベステート)が地面に落ちた音だったのか。

「でも、結果オーライだよ」

褒められてはないよな。

だけど……やっぱ落ち込む。

「トールちゃん、そのまま蟲(ベステート)を斬り刻める？」

「……はあ？」

なにを言ってるんだ？

「そのまま、鎌鼬みたいに、ザクザクって……できたりしないの？」

「……なるほどな。やってみる」

実際にそんな事ができるんだろうか。

だけど、それくらいできないとな。

それができれば、俺の必殺技になるだろう。

こうして、蟲(ベステート)を閉じこめて、風で斬る。

なんだかカッコいいじゃないか。

というわけで、できるかどうかやってみようか。

ヒナゲシさんに教わったのは、風伯は俺の一部だって事。だから、俺がきちんとイメージすれば、風伯はそれに応えてくれるはず。

それを制御できるかは俺次第。

イメージする。

風の壁を維持したまま、その壁から鋭い風を放つ。

それで、蟲(ベステート)を攻撃しているのをイメージするんだ。

イメージしろ。

イメージだ。

.....脳内だと、既に蟲(ベステート)をシュパシュパと風で斬ってるんだけどな.....。なかなか、現実はそうならない。

微妙に風は動くけど、斬りつけるほどにはならない。やんわりとした風が蟲(ベステート)を撫でるだけだ。

それでも、ゆっくりとでも動かしていく。イメージ通りに動かしてみるんだ。自分に言い聞かせる。

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

くっそ……。そんな簡単にできるかっての。できたら苦労しない。

できるのは、よっぽどの天才くらいだろう。あいにく、俺は凡才なんだよ。非凡なものなんてない。

だから、一発でできるわけがない。

「……ごめん、トールちゃん」

「キヨカ、謝るような事じゃねえよ」

「そうかもだけど……」

謝られると、俺がなんだか惨めに思えてくる。

キヨカにそんなつもりがないのはわかっている。だけど、言わずにいられないんだろう。それもわかる。

「まあ、これはこれからだな。今はこれが精一杯だ」

「じゃあ、作戦変更だ。アーちゃん、出番だよ」

そう言うと、キヨカは左手の白いオープンフィンガーグローブを外して、蜘蛛(アラネーオ)を召還する。

召還に応じた蜘蛛(アラネーオ)は、この豪雨でいきなりの大ダメージ。

すまん、蜘蛛(アラネーオ)。

「トールちゃん、なんとかできないかな？」

「なんとかってな……」

そうだな……。難しいけど、やってみるか。

「これでどうだ？」

蟲(ベステート)を囲む風を維持させつつ、蜘蛛(アラネーオ)の上にも風を発生させる。

その風で、降ってくる雨を弾いていく。これで、蜘蛛(アラネーオ)が雨に打たれるのを、少しでも減らせるだろう。

それにしても、違う場所の風を操るのは難しい。なかなか制御できない。

蜘蛛(アラネーオ)の上の風を安定させようとする、どうしても蟲(ベステート)の風が弱まってしまう。

それでも、蟲(ベステート)が出てくる事がなかったのは、ラッキーだったのかもしれない。

「譜遊の四護よ 感謝する、」

「いって。あとは頼むぜ」

思わぬ言葉に照れる。

「了解した、」

「アーちゃん。トールちゃんの風に糸を混ぜて、そのまま蟲(ベステート)をぐるぐる巻きにしちゃって」

「了解した、」

なるほどな。

キヨカのヤツ、相変わらず変な作戦をたてるよな。だけど、なんだかんだで成功してるんだからすごい。

「蜘蛛(アラネーオ)、悪いがそんな器用に操れそうにないんだ。なんとかそっちで調整してみてくださいないか？」

キヨカの作戦だと、俺の風が重要になるだろう。だけど、俺にはそんな風に風を操る余裕はない。今の状態を維持するので精一杯だ。

了解した、

期待してるぜ。

俺は、完全に蜘蛛(アラネーオ)に任せる事にした。

俺だけの力だと、ここまでが限界だ。これ以上は分不相応。修行不足だ。

こうならないように、修行は続けないとまずいな。

だけど、今は蜘蛛(アラネーオ)に頼るしかない。

「アーちゃん、やっちゃって」

キヨカの声を合図に、蜘蛛(アラネーオ)は糸を吐き出す。

その糸は、風に乗るようにして、蟲(ベステート)を囲んでいく。

そして、その糸が徐々に内側に入っていく。

(すげえな……)

感心せずにはいられない。

まさに自分の体の一部って感じなんだろうけど、ここまで自由に操れるのか。

俺も、風をこのくらい操れるようにならないといけないんだよな。

こりゃ、相当修行しないといけないだろうな。

吐き出された蜘蛛(アラネーオ)の糸は、確実に蟲(ベステート)を包んでいっている。

風で見る事はできないが、風を操っている俺は感じる事ができる。

もうちょっとだ。もうちょっとで蟲(ベステート)が動けなくなるだろう。といっても、既に動けないような状態なんだけど。

風で囲んでから、蟲(ベステート)は脱出しようとさえしなかった。

諦めたのか、じっとしていたのだ。なにかあったのか、それとも蟲(ベステート)の作戦なのか。

とにかく、糸で動けなくしてしまえば、もう勝ったも同然だ。

「アーちゃん、もうちょっとだよ」

どうやら、資格者(ティトーロン)であるキヨカも、状態を感じる事ができるらしい。まあ、俺にできるくらいだし。

頑張ってくれ、蜘蛛(アラネーオ)。

俺も心の中で応援する。

今の俺は、この程度のサポートしかできないけど、いつか蜘蛛(アラネーオ)からもアテにされるようになってやるさ。

……って、なんだか毎回思ってるよな。でも、なかなか上達しない。そりゃ、すぐに強くなったりしないさ。特別な修行や、急なパワーアップなんて、漫画の中くらいのものだ。そんな事が

実際にあれば楽なんだけどな.....。

毎日、修行を重ねて、ようやくまともに戦えるようになるんだよ。わかってるさ。そんな楽はできない。

そんな事をしている間にも、蜘蛛(アラネーオ)は糸を巻き付け続けていた。

「風の停止 求む、」

「了解」

蜘蛛(アラネーオ)の要請に応じて、蟲(ベステート)を囲っていた風を止める。

水飛沫をまき散らしながら、徐々に風が弱まっていく。

「感謝、」

風がなくなると、そこには蜘蛛(アラネーオ)の糸でぐるぐる巻きにされた蟲(ベステート)の姿が現れた。それはまるで繭のようだ。

「アーちゃん、封印しちゃって」

「了解、」

蜘蛛(アラネーオ)はその繭に近付き、もしかもしかと捕食していく。

.....まだ数回だけなんだけど、どうも慣れる気がしない。

実際の生態系でもそうなんだろうけど、それを巨大サイズで見るのはまた違う。ぶっちゃけるとグロい。

だからって、目を逸らすわけにもいかないよな。やっぱり、俺たちがしないといけない事でもあるし。

しばらくその捕食を見ていると、その瞬間だけは麻痺してくる。

「お疲れさま」

キヨカが、封印し終えた蜘蛛(アラネーオ)を労う。

「今回も助かったよ」

毎回、蜘蛛(アラネーオ)に助けられてばかりだ。

「お疲れさま。ゆっくり休んでね」

実際の行動とすれば、糸を吐いて、その後に捕食しただけだが、豪雨に打たれ続けたわけだ。それだけで充分すぎるくらい、体力を消耗する。

本当に大変だっただろうな。

俺たちでも大変なのに、蜘蛛(アラネーオ)は元々水が得意じゃないみたいだからな。かなり無理をしていたはずだ。

今回は、相性が悪かったという事か。

それなのに、頑張ってくれたんだな。

最終的に封印するのは蜘蛛(アラネーオ)しかできないわけだけど、それ以前の状態——蟲(ベステート)を行動不能にする事は、俺でするべきなんだよな。

「トールちゃん.....すごいよ」

ん？ なんだろう？

「どうしたんだ？」

「トールちゃん、空」

「空……？」

そう言われて、空を見上げる。

「あっ……………」

そこには、青空が広がっていた。

まだ少し雲がかかっているけど、少しずつ晴れ間が広がっていつている。

そういえば、雨の感覚がなくなっていたんだ。あまりにも当たり前のように、雨に打たれていた
たので、その感覚が麻痺していたらしい。

「すごいな……………」

久しぶりに見る青空だ。

太陽の光が眩しい。そして、気持ちいい。

濡れた体が乾くような事はないけども。

「ううっ、ちょっと寒いかも」

「そうだな」

雨が降っていた方が暖かく感じていられたみたいだ。晴れた途端、肌寒く感じるようになった
。

気温が下がったのか？ でも、晴れたら普通は逆じゃないのか？

その辺はよくわからないけど、実際ちょっと寒い。

「風が冷たいね……………」

そうか。風か。

今までは雨でよくわからなかったけど、晴れた事によって、風が吹いているんだ。その風が、
俺たちの濡れた体に吹き付けてきて、そのせいで寒く感じるんだろう。

——と思ったんだが、それもあるんだろうけど、この場所の気温もそれほど高くないようだ。

「シャワー浴びたい。熱いお風呂に入りたい」

「……無茶言うなよ」

キヨカも無理なのはわかってるんだろうけどな。

「ねえ、早く次の世界に行こうよ」

「そうだな」

俺もシャワーを浴びたいし、熱い風呂にだって入りたい。

「もう、ここにはいないんだよな」

「そうみたいだよ」

「じゃあ、行くか」

「うん。……………ねえ、トールちゃん、あれ……………」

「ん？」

出発しようとしたらキヨカが声を掛けてきた。

なんだよ、早く次の世界に行くんじゃないのか？

ったく……。いったいなにが……。

キヨカが指した方を見る。

「……………」

言葉が出なかった。

綺麗という言葉じゃ足りないし、陳腐に聞こえてしまいそうだ。

俺は今まで、こんな景色を見た事がないし、想像もした事がない。

雨が上がって周囲がよく見えるようになった。

どうやらここは、平坦な地面が広がっていたようだ。見渡す限りなにもない。ただ平坦な土地

。

一面が塩なのか、白く見える。

どこまでも白い大地の上に、薄く水が張っている。

そこに、青空が映っている。

この広い場所全てが空になっている。

それはまさに、天空の鏡のようだ。

これが、この世界の本当の姿だった。

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

心の歌を奏でて 一神の涙一 ㊦

<http://p.booklog.jp/book/48953>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48953>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48953>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ